国家基本問題研究所　第３回「国基研 日本研究賞」に３氏

日本のありのままの姿を見て

今日の日本が直面している憲法、安全保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が、外国人による優れた日本研究を顕彰、奨励する第３回「国基研 日本研究賞」の受賞者３氏を選出した。

最高賞の日本研究賞は、旧満州国内のモンゴル人に焦点を当て、日本陸軍から近代的な軍事教育を受けたモンゴルの〝サムライ〟の生き方を現地取材も交えながら克明に描き出した中国・内モンゴル出身の静岡大学人文社会科学部教授（文化人類学）、楊海英（ようかいえい）氏（51）＝日本名・大野旭＝を選んだ。

奨励賞には、日本統治時代の台湾に生きた一般の人々の暮らしぶりを豊かなエピソードで再現した台湾の女性作家、陳柔縉（ちんじゅうしん）氏（51）と尖閣諸島の領有権について米国の中立政策の背景を緻密に解き明かした元在沖縄米海兵隊政務外交部次長のロバート・D・エルドリッヂ氏（48）の２人が選ばれた。

「日本研究賞」は、連綿と続く日本文明を誇りとし、広い国際的視野に立って日本の在り方を再考する国基研の活動に共鳴する寺田真理氏からの寄付を元に一昨年に創設。その後、本人の申し出により、今回から研究賞名を変更した。

対象となるのは、日本に帰化した一世を含む外国人研究者で、政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で、日本に対する理解を増進する研究に対し、日本研究賞に１万ドル、奨励賞に５千ドルが贈られる。近年に刊行、発表された日本語か英語による作品から選出される。

櫻井理事長は「国際理解を深めるにあたり、日本に対しては歴史問題をはじめとする数多くの誤解があり、障壁となっています。誤解を解くためには、日本のありのままの姿を見てもらうことが大切であり、そのためにはしっかりとした論評が必要です。この賞が相互理解を深める一助となることを願っています」と述べた。

田久保忠衛副理事長も「日本を深く理解する外国の研究者は少なくなりました。ラフカディオ・ハーン（明治時代の文学者、小泉八雲）や詩人で駐日仏大使だったポール・クローデルは世界的な文明の視点を持ち、日本研究の代表的存在。日本の本質に迫る研究者を一人でも多く増やしていく必要があります」と語った。

櫻井よしこ
国基研理事長

田久保忠衛
国基研副理事長

■選考委員
櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長（委員長）
田久保忠衛・国基研副理事長・杏林大学名誉教授（副委員長）
伊藤隆・東京大学名誉教授
平川祐弘・東京大学名誉教授
渡辺利夫・拓殖大学学事顧問
髙池勝彦・国基研副理事長・弁護士

来月６日に記念講演会

第３回「国基研 日本研究賞」受賞者、楊海英氏による記念講演会を開きます。

日時　７月６日（水）午後６時半～８時半（開場６時）

場所　イイノホール（東京都千代田区内幸町２の１の１　飯野ビル４階）

会費　3000円（一般）、1000円（国基研会員）。当日会場でのお申し込みはできません。

申し込み方法　【記念講演会参加希望】と明記の上、氏名（国基研会員は会員番号も記入）、郵便番号、住所、電話番号を記載し、はがきもしくはFAXでお申し込みください。参加券を発送いたします。定員（450人）に達し次第締め切ります。６月24日（金）必着。〒102-0093　東京都千代田区平河町２の８の10　平河町宮川ビル３階　国家基本問題研究所S係　FAX03・3222・7821。

日本研究賞　静岡大学人文社会科学部教授 楊海英（ようかいえい）氏

「モンゴル」を忘れないで

1964年、中国・内モンゴル自治区オルドス生まれ。北京第二外国語学院大学アジア・アフリカ語学部日本語学科を卒業。89年３月に来日し、国立民族学博物館・総合研究大学院大学博士課程を修了。2000年、日本に帰化。06年から静岡大学教授。11年、『墓標なき草原（上下巻）』で第14回司馬遼太郎賞を受賞。他の主な著書に『中国とモンゴルのはざまで』（岩波書店）、『ジェノサイドと文化大革命』（勉誠出版）。モンゴル名のオーノス・チョクトを訳した日本名が大野旭。

１９８９年に来日し、２０００年に日本に帰化した楊海英氏は文化人類学者として、長く内モンゴル自治区と新疆ウイグル自治区、カザフスタン、ロシア、モンゴルの遊牧社会で現地調査を進めてきた。１９６０年代の中国の文化大革命期に内モンゴル自治区が受けた激しい弾圧の実態をあぶり出した２００９年刊行の『墓標なき草原（上下巻）』（岩波書店）では、第14回司馬遼太郎記念財団主催）を受賞している。

「日本研究賞」の受賞理由となったのは、『チベットに舞う日本刀　モンゴル騎兵の現代史』（文藝春秋）と『日本陸軍とモンゴル　興安軍官学校の知られざる戦い』（中央公論新社）の2冊。いずれも、当時の日本陸軍が満州国でモンゴル人に軍事教育を施す目的で創立した興安軍官学校を軸に据える。前者は、軍官学校の出身者や日本陸軍士官学校への留学経験者らで構成された近代的な騎兵部隊が、民族自決の実現を目指す戦闘集団の先陣となっていく姿や、終戦に伴い精鋭の彼らを襲ったいくつもの悲劇を描き出す。後者は、日本の支援を受けながら中国の影響から脱して民族国家の建設を志した若き軍人の苦闘を描く。どちらも、生存者らの肉声や当事者の記録文献を積み上げた労作だ。

終戦後、大国による「ヤルタ協定」により南（内）モンゴルは中国の支配下に入り、南北モンゴルの民族統一という夢は阻まれる。騎兵も「対日協力者」とみなされた。抵抗者は殺され、残った者は中国によるチベット侵攻の先兵を強いられ、同じ少数民族であり宗教上のつながりもあるチベット人に馬上から日本刀を振り下ろさざるを得なかった。さらに、文化大革命期に騎兵は武装解除させられ、「民族自決権への死刑宣告」を意味する大量虐殺が行われたと記す。

楊氏は著書を通じ、「日本人よ、『モンゴル』を忘れないでほしい！」と請う。理由は「『モンゴル』を忘れることは日本自身の近代史のなかのプラスの面を捨てることになるからだ」。一方で、民族が南北で異なる国家に分断され「半分がまた中国人の軛（くびき）に繋（つな）がれている」として、「責任の一端が日本にあるのも否定できない事実であるからだ」とも訴える。戦後の歳月が長くなるほどに、その言葉は日本人に重く響いてくる。

日本語は文明の言葉

《受賞の言葉》モンゴル人にとって、日本語は近代化を象徴する洗練された文明の言葉である。日本は南モンゴル各地に学校を創設して教育制度を普及させ、先進的な医学の知識と衛生観を広げた。その結果、草原の遊牧民は近代的な民族に変身した。

「ヤルタ協定」の密約により南モンゴルが中国に売り渡されても、民族自決の機会を奪われたモンゴル人たちが日本的精神と思想を固く守りながら力強く生きてきたことを本書２冊の中で描いた。日本人とモンゴル人の生き方に日本近代文明の精粋が宿っている、とモンゴル人は信じている。

《講評》櫻井よしこ・国基研理事長　モンゴル人の視点に基づく日中両国の民族性および国柄の比較は日本人自身に改めて日中両国の文明の隔たりを知らしめる。優れた日中文明論でもある楊氏の作品は日本に対する切な要望でもあろう。

モンゴルなど、かつて日本が支配下に置いた民族や国では、実は大東亜戦争の傷は癒えていない。それらの国々の現状を放置せず、その真の回復のため日本が積極的に関与していくことが求められている。特にモンゴルでは日本への期待が強いことを認識してほしい、と楊氏は語っているのではないか。

奨励賞　作家 陳柔縉（ちんじゅうしん）氏

統治時代が持つ別の一面

1964年、台湾・雲林生まれ。台湾大学法学部を卒業し、日刊紙「聯合報」の政治部記者などを経て、現在はコラムニストとして活動。主な著書に『總統的親戚（大統領の親戚）』『台灣西方文明初體驗（台湾西洋文明事始め）』『舊日時光（古きよき時代）』。聞き書きに『国際広報官　張超英―台北・宮前町九十番地を出て』。

台湾の有力紙「聯合報」の政治部記者などを経て、コラムニストとして活躍する陳柔縉氏は戦後生まれ。日本統治時代の台湾を伝える著作の第一人者と評価されている。

奨励賞の対象である『日本統治時代の台湾　写真とエピソードで綴る１８９５～１９４５』（ＰＨＰ研究所）は２００９年に中国語で刊行されると、歴史に深みを感じさせる内容が世代を超えた反響を呼び、台湾政府主催の出版賞「金鼎奨（きんていしょう）」を受けた。

「ダイヤ泥棒」「イケメンセレブ」…。歴史書や回想録とは一線を画し、当時の日本語新聞などを集めて小さな記事も拾い上げ、市井の人々の人間味あふれる27のエピソードをユーモラスに再現。中には、東京での台湾人の足跡もたどり、〝日本にあった台湾〟も描いている。

陳氏は本書を「台湾人と日本人が一緒に奏でた交響曲のような作品」とし、統治時代に日本政府が台湾に対して行った不平等な施策もあったと指摘する一方で、「二つの国の人びとはあの時代、辛（つら）くとも楽しい日々をともに歩んでいたのだ」と語りかける。

「一般人」の角度から

《受賞の言葉》日本統治時代に関する7冊の本をこれまでに書きました。原動力は、台湾の近代に大きな影響を与えたはずの日本統治時代が、その後、政治的な理由で隠蔽（いんぺい）され、歪曲（わいきょく）されていたからでしょう。「一般人」の角度から日本統治時代を観察しました。日本人と台湾人の50年の暮らしを理解し、感じることができると考えました。

《講評》田久保忠衛・国基研副理事長　台湾の知人、友人から教えてもらったのは、後藤新平、新渡戸稲造、八田與一らの優れた日本人がいかに台湾のために尽くしたかの美談が多かった。実際に台湾の専門家が書いた日本人の優れた伝記類は少なくない。本書の視点は異なる。「台湾が日本だった時代、祖父母の世代はどんな暮らしをし、どんな感情を抱いていたのか」の角度から戦前の一般的日本人をみた。取材したものを柔軟な表現で書くコラムニストなのだ。影響力は大きい。

奨励賞　元在沖縄米海兵隊政務外交部次長 ロバート・D・エルドリッヂ氏

尖閣問題「愚かさ」と戒め

1968年、米ニュージャージー州生まれ。90年、来日。99年、神戸大学大学院で博士号（日本政治外交史）を取得。大阪大学大学院准教授を経て、2009～15年、在沖縄米海兵隊政務外交部次長。現在、法政大学沖縄文化研究所国内研究員。03年には『沖縄問題の起源』（名古屋大学出版会）でサントリー学芸賞を受賞している。

日本政治外交史の研究者である沖縄在住の知日派米国人、ロバート・D・エルドリッヂ氏。２００９～15年に在沖縄米海兵隊政務外交部次長を務め、東日本大震災の際に行われた米軍による救援活動「トモダチ作戦」を提言し、実現させた。

来日26年。日米関係や戦後沖縄史、安全保障に明るいエルドリッヂ氏による日本が抱える安全保障の課題に対する論考は、常に刺激に満ちている。奨励賞の対象である『尖閣問題の起源　沖縄返還とアメリカの中立政策』（ラウトレッジ社・名古屋大学出版会）も、膨大な資料を基に母国の戦略的曖昧性を「愚かさ」と戒める。

尖閣諸島について、米国は「日米安全保障条約が適用される」と表明しながらも、領土が日本、中国、台湾のいずれに属するかに関しては中立の立場を貫いている。本書はその理由について、沖縄返還交渉をめぐる舞台裏などの検証により解き明かしていく。

エルドリッヂ氏は本書で尖閣諸島に対する日本の領有権を明確にしたうえで、「アメリカが断固とした姿勢を示すこと」が東アジア地域の平和と安定を確保する唯一の方法だと見通す。

本書通じ平和貢献期待

《受賞の言葉》大変光栄に思っています。尖閣問題をめぐる歴史をより正確に理解するために書いた拙著は、意図しなかったにもかかわらず、日本の尖閣諸島に対する領有権を明確にしています。米国政府が日米の安全保障の連携強化によって、この地域の平和に貢献することを期待します。

《講評》髙池勝彦・国基研副理事長　本書は、公刊された文献はもとより、米国の外交文書を渉猟し、これ以上ないと思われるほど詳細に事実が語られる。70ページ以上の脚注が、その事実の正確性を担保している。

著者は、結論として、米国が沖縄返還の際に、日本の立場を支持しなかったから現在の混乱を招いたという。英語で出版されたものの訳本であるが、このようなものが英語で出版されたということはわが国にとって非常に役立つものである。